

新潟大学学生の授業レポートに見る 教育の課題と希望（第二回）

西 伸 之

大学授業と学生のレポート

2017年から新潟大学教育学部で道德教育についての授業を担当しています。最初は「道德指導法」という名称でしたが、現在は「道德教育論」という名称の授業です。対象は、主に2年生ですが、3・4年生も若干おり、合計で約150〜180名ほどの学生が受講しています。一昨年までは大講義室でマイクとパワーポイントを使つての対面授業でしたが、コロナ禍の中、2年続けてのオンライン授業になりました。

中学校社会科教師の経験と、30年近く続けている「アーベルの会」（新潟県子どもの発達と不登校を考える会）の活動、さらに組合役員の経験をもとに、道德

に限らず、教育や教師について、また子どもたちについて語り、学生とともに考える、そんな授業を90分×15回やつていきます。

各回の授業は、道德教育の歴史や道德で扱う価値観やテーマ、道德教科化の問題点、その可能性など、道德教育にかかわることが中心です。しかし、「学校における道德教育は、特別の教科である道德を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道德科はもとより、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、生徒の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない」（学習指導要領 解説 特別の教科 道德編）とあるように、道德教育は学校の教育活動全体を通じて行うのです。

から、私の授業では、いじめや不登校、生徒指導、学校行事、進路指導、生徒会活動、部活動など幅広いものを題材に取り上げています。

授業は、テーマに沿って私が話をするという形ですが、授業の前半は、毎授業後に提出する学生のレポートを基に、前回取り上げた内容をさらに広げ深める時間に使っています。そのため、毎回150本近くのレポートを読み、評価し、内容ごとに分類し、A4用紙8枚程度にまとめ、次回授業の資料として授業2日前までに学生に送り返すという作業を繰り返しました。授業後の2日間ほぼ終日その作業に没頭するという14回の授業でした。

その作業は大変でしたが、学生の体験や率直な考えが書かれたレポートは、新たに気づかされたり考えさせられたりすることが多く、私にとって大いに学べる楽しい時間でもありました。また、私が送る（整理し抜粋した）他学生のレポート資料は、学生たちにとって新鮮な体験だったようです。それは、本来体験していなければならぬ、小中高時代の友達やクラスメートとの深い対話や話し合いが、彼らの体験には欠落しているということの裏返しでもあります。

『大学生の授業レポートに見る教育の課題と希望』の第1回前半は、「他者の考えに触れる」という新鮮な体験をした彼らの気持ちが書かれたレポートを紹介しています。

「他者の考えに触れる」

〳 他者の学生のレポートを読んで

・他の受講生の意見からも多くを学ぶことができた。他の受講生の意見は、同じ方向を向いた意見だとしても、私が考えもしなかったような深い領域まで考えを巡らせている意見もあれば、私にはどうしても納得できない、私とは正反対の意見もあった。しかしどの意見も私に新しい世界を見せてくれた。私はこの授業を通して、自分と違う様々な考えに触れ、それを受け入れることはできなくても、認めることができた。これは私にとって、人として成長するためのとても大きな一歩になったと思う。

・道徳教育論を受講してよかったと思うことは、同世代の教員志望の学生が講義内容をどのように受け止めているのか、どんな考え方を持っているのかを知る機会が設けられていたことです。毎回学生のレポートを

まとめたものを送ってくださったことで、他の学生の意見を見ることができ、自分と同じ考えやそうでない考え、自分よりも素晴らしい考えがあることを知り、自分の考え方・意見がどのような位置にあるのかを確認していました。

・私はこの道徳教育論という講義で、様々な人の様々な考えが知れたことにとても満足している。私は今まで生きてきた中で、世の中には様々な考え方があり、それは認識しながらも、実際に様々な考えを、授業を通して感じる経験をしたことはなかった。小、中学生時代の話し合いは、考えが浅すぎて議論すらできないようなものであった。それに比べ、この講義のフィードバックでは、皆さんがなかなか深いところにまで切り込んでくるため、授業が終わりフィードバックを見るたびに、「ああ、そういう考え方もあるのか」と、何かしらの発見をすることができた。私がこの講義を通して道徳が好きなようになったことは事実である。だからこそ、私が道徳の授業を教えるときは、価値観を押し付けるようなものではなく、みんなで議論しあえるような展開にしたいと思った。

・毎授業で学生のレポートに対して先生の思いを語る

というのが、自分の中で特に印象に残っている。大学に入ってからずっと非対面式授業で、オンラインで一方的な話を聞くことが多かった。この授業では毎回の授業でレポートを課して、その次の授業でレポートの中からフィードバックを行ったり、事前に学生のレポートの内容を配布したりして、他の学生の意見や気持ちを知れたり、それに対する先生の思いが知れたりした。それが自分にとっては、授業の中で一番大切な時間だなと思った。入学以来ずっと非対面式授業で、対面式授業というのがわからないが、この形式の講義では他の学生の空気感も伝わり、非対面式授業ながらもとても満足するものだった。

・この講義では毎回自分以外の人達の意見を見ることができてとても面白かったです。いじめなどの部分では、見ていてつらい部分もあったし、いじめは加害者側が一方的に悪いと思っていただけで、加害者にも考えがあることを学びました。毎回ではないですが、たまに自分の意見も取り上げられていて、私の意見も他の人の学びに役立っているのかなと考えると、自己肯定感がとても上がりました。私がもし教員になったらこのような活動を積極的に取り入れたいなと思いました

た。

・2年生になり、本格的に教員になるための授業が増えた。しかし、オンラインでしか授業がない環境で、同学年の人と関わることはないまま大学1年生を終えて、特に成長のない自分が教員を目指していいのかと思っていた。しかし、授業を受ける中で、教員とはどのようなものなのか、教員には何が大事であるか、子どもにはどう向き合うべきかななどを考えることができた。また、それらの問題意識に対して、同じ講義を受けている学生がどう考えているかを、毎回の講義で知ることができ、なんとなく繋がっているように感じることもできた。多様な考えを共有することで、新たな視点を得ることができたのが、私にとつてとても良かった。

・この授業は、受講者の経験や率直な意見・考えが1つの授業資料として用いられたことで、より身近に感じることができ、考えさせられる部分が多かった。また、それで自分自身の視野が広がったような気がし、一人の人間として内面的な部分で少し成長できた気がする。

・講義を受けて引きずっていた過去からの悩みが浮か

んだとき、かなり乱暴な言葉でレポートにぶつけてしまったこともあったが、それでもひとつの題材として他の学生が言及してくれたことから、自分の問題解決の筋道が見えてきたときは特に嬉しかった。

・この講義を受けて、自分が今までに持っていた考え方の他にもいろんな人の考え方があるということを実感した。もちろん、同じ人間は一人たりともいないわけだから多様な考えがあつて当たり前である。しかし、どこかで「これはこうじゃないとだめだ」と自分の中で固定観念がつくられていて、勝手に考え方が縛られていた。この講義で紹介される学生の感想や意見に、毎時間共感したりハッとさせられたりした。他者の考えを、「確かにそうだな」とすんなり受け入れられたのは、答えが一つではない、この道德教育論の授業だからこそであつたと感じる。

小中時代の道德授業の思い出

『大学生の授業レポートに見る教育の課題と希望』の第1回後半は、小中時代に受けた道德の授業の思い出を書いたレポートをいくつか紹介します。道德教科化の危険性と可能性が見えてきます。

「決まった答え、つまらなかった」

・私が小中学校の時に抱いていたイメージは「つまらない」だ。教科書がありそれに沿って授業を進めていったのだが、内容は考えさせるかのように思えて、実は決まった答えが浮かんでくるものだった。

・教科書をみんなで音読して、物語の登場人物の心情や物語のその後を考える授業をしていた記憶があります。道徳の授業という教科書を音読して考える、眠たい授業というイメージがあります。

・道徳授業のイメージは、「勉強をしない授業」。「楽な授業」というイメージが強く、何かを学ぶという感覚では授業を受けていませんでした。私が受けていた道徳の授業は、「心のノート」を用いて、自分の考えを配布されたプリントに書き込んでいくという形式が多く、とりあえず綺麗ごとを書いておけばいいだろうというひねくれた考えを持って受けていました。今思えば、周りも適当に受けているのに、自分だけ真面目に授業を受けるのはどこか恥ずかしい思いがあつたように感じます。

・道徳で扱う話は、あからさまに「こう答えてほしいんだろうな」というような文が多く、ほぼ全員が同じ

意見を発表していた。その結果ただの読書タイムになっていた気がする。どちらが正しいとも言いきれない文章を読んで、さまざまな意見を交換することができたらとても面白いだろうなと感じた。

・教科書に載っている物語を読んで、その感想を書くというものでした。あまり印象に残っておらず、授業自体も重要視されているという感じではなかったため、蔑ろにされていたかもしれません。正直な話、自分自身も大事な授業であるとは思っていませんでした。また、教科書に載っている問いを読んだときに、「こう答えてほしい」「こういう考えを持ってほしい」というような感じがして、押しつけがましいと思っていました。

・小中学生の時に受けてきた道徳の授業では、テキストに載っている文章を読み、「学習の手引き」をクラス全員で考えるものが多かった。そこでは、教員からの誘導が多少あり、答えが一つの方向性に定まることがほとんどだった。今まで自分が受けてきた授業は、テキストを作った人や教員があらかじめ設定した答えに向かって進んでいるものだった気がする。ならない。

・ある問題に対して、社会的に無難な回答が多数を占

め、それ以外はおかしいような雰囲気があった。また、教師もやはり望んでいる答えの誘導をしているように思える。

「正解」を探し答えていた

・私が小学校の時の道徳の授業はとにかく退屈であった印象がある。教材を読み生徒が意見を出していくが、自分の意見ではなく、正しい意見は何か、どういうのが正解なのか、「正解探し」をしていた記憶がある。

・自分の意見といっても、先生や教材の言葉を肯定する言葉ばかりを解答していました。

・いろんな人の意見を聞いてクラス全体の意見をまとめるといった授業が多かったが、なんとなくこの答えにたどり着かなければいけないのだらうというのが先生から読み取れたので、それに近い回答を私は答えていた。

・道徳の授業は、結局のところ綺麗ごとを言う先生が評価してくれるというイメージがあります。さらに、自分が考えたことと、綺麗ごととの違いが分からなくなる時があり、「自分が思っていることはどこか頭の片隅で綺麗ごとを意識しながら考えているのではない

か」と思う時が結構ありました。

・道徳の授業では「先生はこの回答を求めているんだ」と考えて、自分の考えよりも世間一般の正論を言っていました。道徳・哲学を考えることはとても好きなのですが、授業になると「正しい」ことを言わなければいけないと感じ、また「正しい」答えを先生から求められているようにも感じられて、あまり楽しい授業ではないというのが正直な印象です。

・小学生の頃は、なんとなく答えが決まっていて、綺麗ごとばかりの道徳の授業だったような覚えがあり、私自身もどんな意見を述べるのが正解なのか、先生の顔色をうかがっていたような気がします。

・読み物をみんなで読んで、どのような行動をとるべきなのか、正しい行動は何だったのか、あなたならどのような行動をとるのかといったような問いに生徒が答えていくことが多々あった。いつも道徳では、自分の考えていることというよりも「正しい」と思えることを答えなければならぬというイメージがあり、周りに合わせていることが多かった。

・中学校の道徳の授業で、ある問題に対する答えが2つの選択肢で提示され、「自分なりに考えてどちらか

の選択肢を選んでください」と先生に言われた。大多数が1の選択肢を選んだところ、生徒の考えも聞かず先生が1の選択肢を選んだ生徒を叱り始めた。それ以来道徳の授業は、先生の顔を伺いながら行うようになってしまった。

・ 問いについて、自分で考え周りと共有し、多数出た意見を「正」と受け取るような雰囲気になっていたと思う。もちろん教師は「これは答えがない問題です」と始めに仰っていたが、多数の意見からずれた回答にはあまり良い反応を示さなかったように感じる。今までの思い出から抱いた道徳授業のイメージは、「世間一般的に正しいとされる思考」にいかに関近づけるか、というものである。道徳的規範・道徳性が養われるように、教師から誘導されながら答えを模索するイメージがあった。

「嫌だった、苦しかった」

・ クラスの雰囲気や先生によつては、授業中指名され、私の意見を掘り下げられるのが嫌で、クラス内で一番平均的な意見を、自分の意思に関わらずプリントに書いたり発表したりしていたような覚えがあります。

・ 小中学校のときの道徳の授業は、必ずしも答えがあるというわけではなく、個人個人の考えを求める授業だったので、答えがうまく出なくて、とても悩んだことを覚えています。

・ 私の受けていた道徳の授業は、正しいことを言わなければならぬような雰囲気があつて、思っていることを言えない環境でした。

・ 小学生の頃の道徳の授業は、周りと意見を合わせなければいけないということばかり考えているのが疲れると感じていました。

・ 道徳は答えがなかったので、自分はあまり好きな授業ではなかった。また、自分の考えがほかのクラスメイトと考えがかけ離れていないかが心配で、先生にかけられて発言するのがすごく恥ずかしかった覚えがある。

・ 私は、道徳の授業があまり好きではなかった。道徳の授業といえば先生が私たちの良心を試すように質問してくる印象があるからである。私はそのたびに、自分の弱さを自覚させられるような感覚に陥って、胸の苦しさを感じていた。

「授業の意義が分からなかった、納得しないことが多かった」

・これまで私が受けてきた道德教育は、一つの正論を教えてもらう教育だった。授業中に先生が生徒に発言させるが、先生の望む答えのみ取り上げられていた印象がある。それゆえ、「仲間外れはいけない」「やさしさが大事」など、決まりきった答えがあるのに、なぜまた学ぶ必要があるのかと道德の時間に対して思っていた。

・私は、小中学生のころなぜ道德を受けるんだろうと思っていました。理由は、教科書で物語を読んで話し合っても結局常識的に考えて当たり前だろうという事しか出てこなかったからです。普通に考えれば誰でも出てきそうな内容を考えることに、何の意味があるんだろうかと思っていました。

・私の中学校の道德のイメージは、きれいごとの意見しかででこず、気持ち悪くつまらないものだと思っていた。当時の私の性格がひねくれているだけかもしれないが、道德なんてきれいごとを並べるだけであり、本音が出てこないの、やる意味がないと思っていた。こんな授業受けたところで心変わりするわけがないと思っ

ていた。

・小中学校の道德の授業は、きれいごとと本心の葛藤があつたように思います。理想とする姿があつて、その意見を紙に書き、発表するのがおそらく正解だと思いい授業に取り組んでいました。ですが、本心はそんなのはきれいごとだな、と思うことも多々ありました。

・先生が言ったことに対して納得していないのだけは覚えていて、ありきたりだとか、それはたしかに世間的には見たら正しいことなのかもしれないけど、自分からしたらそれは正しくないなどというふうに感じたことがあり、自分の心にはあまり響かなかつた。

「楽しかった、面白かった」

・私は道德の授業を、とても面倒くさいものだと思っていた。なぜなら、道德は答えがひとつではないため、難しいテーマに対して考えを絞ることが大変だと思っていたからだ。でも私自身、テーマについて1人で黙々と考えるのは好きであつた。道德は面倒くさいものではあつたが、同時に色々な物事について考えさせられるものが多くて、面白い授業でもあつたと今では思う。

・小中学校の道德授業は、私にとってリラックスして

臨める授業でした。なぜなら他の授業では自分の考え方が間違えて否定される不安がありました。が、道徳授業では自分の意見を言っても否定する人が誰もいなかったためです。先生が、「自分の思ったことをそのまま書きなさい」とやさしく声掛けしていたことも印象に残っています。普段あまり発言しないクラスメイトが積極的に意見を言っていたのも、先生の雰囲気づくりの効果だったのではないかと今は思います。

・私が受けた道徳授業の思い出は、自分の心と向き合い一番考えさせられた授業であったことである。友達との話し合いの時間も多く、自分の意見と友達の意見の違いに気づき、自分の中で意見を整理し直しより強いものにするなど、良い刺激になっていた気がする。そして、答えのない授業というイメージが強い。誰が間違っているわけでもない、たくさん意見が飛び交う授業は、他の授業ではあまり見られない光景だった。・道徳では自分である事柄について考えた後、グループになって意見を出し合い、最後にグループごとに発表するという形をとっていました。自分が考えていたことと全く違う意見を持つ人も少なくありませんでした。しかし、そう考える理由を聞くと、納得できるも

のが多かった。人と話し合うことで、いろいろな視点を得ることもできた授業でした。

「心に残っている授業、その他」

・私が一番印象に残っている道徳の教材は、『泣いた赤おに』だ。赤鬼と青鬼のやりとりを中心に、さまざまなことを考えさせてくれる内容である。(略)「友達や友情とは何なのか」「青鬼の自己犠牲にも見える行動は本当の優しさといえるのか」など、いろいろな考える教材だった。この教材は小学校・中学校の両方で扱われたが、小学校の時よりも中学校ではより深く心情を考えることが出来た。

・印象に残っているのは、「ピアノ線を使った殺人事件」を取り上げた授業です。毎晩深夜に大きな音を立てながら走り回るライダーがいたのですが、その音に困り果てた住民がそのライダーが毎晩通る道にピアノ線を張り、ライダーがピアノ線に引っかかり死んでしまったという事件でした。この場合、悪かったのはライダーなのか、それともピアノ線を張った住民なのかと問われました。私はいくら音がうるさかったとはいえ、人を殺してはいけないと思い、住民が悪いと答え

ました。しかしライダーが悪いと答えた人もいました。当時の私はこの問いには、どちらが悪いという答えがあるものだと思い、授業を受けていましたが、先生は最後まで答えを言いませんでした。

・中国で、犬の肉を使ったラーメンが食べられている話をされ、「かわいそう」と答えた生徒に対して先生が、「どうしてそう思うの？」という質問をした授業はとても印象に残っている。

・中学生の時に授業で「コウノドリ」というドラマを見たことだ。命の尊さ、その命を背負う責任など、まだ子どもでそのあたりの理解が浅かった私にとつて、非常にインパクトのあるもので、自分の両親も私を出産すると決めたときに同じような葛藤があったのかと気になったものであった。

・中学生の頃の道徳は、担任の先生が熱心に授業をしていた。先生は毎回、「みんなが同じことを考える必要はないし、周りに合わせる必要もない。ただ、自分の考えをしっかり持って臨んでほしい」とおっしゃっていた。さらに、毎回授業終わりに感想カードを書いていた。

大学生の体験や中学生の声から見える「道徳教科化の危険性と可能性」

大学生の道徳授業の思い出レポートは、道徳授業の危険性と可能性を教えてくれています。強さと弱さを併せ持つ人間への敬愛と寄り添いがなく、「きれいごと」を語り特定の価値観へ誘導するような道徳授業は、楽しくないどころか、子どもたちを苦しめゆがめる害悪でしょうか。一方、多面的・多角的に物事をとらえ、考え議論し、多様な価値観や生き方を尊重する道徳授業は、新しい時代を切り開いていく力を子どもたちにつける意味あるものになるでしょう。

最後に、中学生が書いた「つまらない道徳授業」と「楽しい道徳授業」を紹介します。

「中学生にとってつまらない道徳授業」

・「こうしなさい」「こうあるべき」って、『中学生らしさ』を押し付けられている感じ。

・道徳の授業って、最初から結論が見えていて、そこに誘導されていく感じでつまらない。

・「そんなこと、本当にあるのかなあ？」みたいな無理な設定の話が多くて、それについて「考えなさい」

と言われても困る。

・「きれいなこと」ばかり。自分にはできないし、「立派な人」や「立派な生き方」を押し付けられるとイライラする。

「中学生にとって道徳授業が楽しかったとき」

・みんなが書いた意見を読みあうときが楽しかった。

「そんな意見もあるんだ」って驚いたり、「自分と同じだ」って、ホッとしたりできるから。

・答えが一つに決まっていなくて、みんなでいろいろな意見を出しあう授業は楽しい。

・先生が自分の意見を取り上げてくれ、みんなが「なるほど」とうなずいてくれたとき、安心したし、うれしかった。

・ニュースになっていることを話しあううちに、自分の考えが深まって、最初と全然違う意見になった。ちよつと大人になった気がしてうれしかった。

(にし のぶゆき)

「閔妃暗殺事件」に新資料

朝日新聞(11・16)に、「日本の軍人らが朝鮮王妃を殺害した『閔妃(ミンビ)暗殺事件』で、実行犯の一員だった外交官が、事件翌日に郷里の親友に宛てたとみられる書簡が見つかった」との報道だ。

閔妃暗殺事件は、金文子(歴史家)の著作『朝鮮王妃殺害と日本人』等から知った。歴史の真実が加害者の書簡から明らかになるのは、珍しいのではないか。

この発見された手紙は、どうやら本物らしい。当事者が事件直後に具体的殺害の手口まで生々しく述べ、「王妃を弑(シイ)し申候」と、任務の自覚も文字に込められているようだ。

しかも、この差出人は堀口九万一(領事官補)だった。この人物は、長岡市では著名な「外交官」として紹介されており、詩人でフランス文学者・堀口大学の父親でもある。

この貴重な歴史資料を残した加害者への驚きもあるが、それが発掘された意義は大きい。

(河合)